

随想 (Essay)

学生時代の思い出

Memories of my collage days

田中 節雄^{*}
TANAKA, Setsuo^{*}

キーワード：東京都立航空工業高等専門学校，東京大学教育学部，教育，教師

Key words : Tokyo Metropolitan College of Aeronautical Engineering, Faculty of Education,
The University of Tokyo, Education, Teacher

私の学生の頃の思い出を二つ書いてみたい。

将来，教職に就くことを目指して教育学部で学んでいる学生の皆さんにとって意味があるといいのだが，はたしてどうだろうか。

* * *

一つ目は大学進学という進路を私が選んだ経緯の話だ。

私は大学で教育学を学び，研究者の道を選んで大学院へ進学し，大学の教師という職を得て定年までを過ごしたのだが，元々，高校から大学という大多数の大学生が辿る普通のコースを辿ったわけではなかった。中学卒業後，私が進学したのは，卒業生を技術者として企業へ就職させることを目的としていた高等専門学校だった。私は高専を卒業後，一年の浪人を経て，大学へ入学したのだった。「高専卒業→技術者として就職」という道から，大学進学という道へ転進したのだった。

東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年，私は中学3年生だった。高校進学率は70%，大学進学率が15%（男子25%，女子5%）という時代である。私の家は貧しかったので，中学卒業後の進路選択の際，高校進学は許されていたが，大学進学の余裕はなかった。したがって，普通科高校への進学は始めから選択肢になく，職業科高校への進学だけが可能だった。

私は理系の科目が得意だったので工業科への進学を選択した。私が住んでいた東京には工業高校が数十校あったが，その中から5年制の「東京都立航空工業高等専門学校」という長い名前の学校を受験し，幸いにも入学できた。

工業高専は第二次大戦前の「専門学校」に相当する学校だ。戦後の学制改革によって「小学校・中学校・高校・大学」という単線型の学校制度ができて，教育の機会均等が進んだのだが，大学卒と高校卒の間に位置づけられるような学歴の人間を欲し

* 椋山女学園大学名誉教授

本随想は，紀要14号編集委員長（野崎健太郎）の要望に応え，田中教授が執筆された。ご快諾頂いた田中教授に深く感謝する。

がった産業界の要請に応じて1961年に作られたのが高等専門学校だった。卒業後は大企業の工場で現場の技術者として働くことが想定されていた。そのために、工業高校と同じような実習の授業があった。私も旋盤の操作や鋳造や溶接などの実習をやった。また、他方では、電磁気学や流体力学や材料力学、あるいは航空機設計など、かなり高度な専門分野の科目もあった。

私はかなり真面目に勉強に取り組み、成績は良い方だった。そのまま素直に高専生の生活を続けていれば、就職は何の問題もなかった。

入学して3年ほどは、普通の真面目な学生生活を送った。

しかし、3年が終わり4年になる頃から、自分の将来について、自分の生き方について、さらに、自分自身という人間について、色々と考えるようになった。

〈今まで、自分は親や教師など他人が敷いてくれたレールの上を歩いて来た。それではダメだ。自分の人生のレールを自分で敷かなければならない。自分の人生は自分で創りたい。しかし、そうするためには、今の自分ではダメだ。自分という人間を変えなければ。〉

私がこんなことを考えて自分なりに悩んでいた頃、社会では、ベトナム戦争反対運動が盛り上がり、大学では、大学教育のあり方に対する不満などから学生運動が全国の大学で爆発的な広がりを見せていた。

大学生の反乱の理由の一つに「大学は企業が求める専門的知識技能だけを持った人材の育成をもっぱら目指し、人間形成という本来の教育を行っていないのではないか」という大学教育批判があったが、実は、そのような批判は高等専門学校の教育にこそ当てはまっていると、その当時、私は思っていた。自分の頭で考えることは求められず、高度な理論を導き出すことや証明することは「大学で学ぶこと」とされ、高専ではもっぱら「教わった理論や公式を当てはめて問題を解くこと」に専念させられた。

高専の5年生になった頃（1969年4月）、将来の進路についての悩みはいよいよ深刻になった。このまま普通に卒業して企業に就職することは可能だが、その選択でいいのか。このまま進んで行って、自分の人生のレールを自分で敷けるようになるのか。かと言って、就職しないなんていう選択肢がありうるのか。そんなとんでもないことができるのか。そんなことを毎日毎日考えていた。

私は結局、高専卒業後、就職をせずに大学受験をすることになるのだが、その選択をするに至ったきっかけは二つあった。

一つは、自分の人生のレールを自分で敷けるようになるには自分自身の人間改造が必要であり、しかも、そのチャンスは高専を卒業する今しかないと思ったこと。自分自身を変えるためには、ここで一度レールから外れなければならない。ここで就職し

て企業の一社員としての生活を初めてしまったら二度と「周囲の人間が敷いてくれたレールの上を歩く」という生き方を変えることはできないだろう、と思えた。こう考えた私は、就職活動が始まった5月頃、卒業しても就職しないことを決め、親や教師にその意思を伝えた。この時点ではまだ進路選択として大学進学は視野に入っておらず、ただ就職しないということだけを決めていた。

もう一つは「社会科学を勉強したい」と強く思ったこと。将来は航空機製造に関わる技術者になりたいという希望は持っていたが、ベトナム戦争を始めとしたさまざまな社会の問題や教育の問題さらには人間の問題について深く考え正しく判断するためには、現在の自分には社会科学の知識が決定的に不足しているを感じていた。社会科学を勉強するためには大学へ行く必要があると思った。夏休みが終わった頃から「大学で一般教育科目（現在の教養教育科目）の社会科学を勉強したい」という思いが強くなっていった。

こうして、高専5年の10月頃、私は大学進学を決意した。同学年には200人の生徒がいたが、大学進学を目指したのは私一人だった。同級生たちは全員就職を決めていた。当然ながら大学進学希望者に対する学校の支援は全くなかったのも、私は書店で大学入試参考書を数冊買い、一人で受験勉強生活に入った。高専卒の3年次編入を受け入れていた大学もあったが、教養課程で社会科学を学ばなければ大学へ行く意味がなかったのも、編入の道は選択しなかった。

受験先は一校だけで、大阪府立大学工学部航空工学科を受験した。不合格だった。

受験生であれば当然持っているべき知識を持っていなかったのも、不合格は当然だった。大阪の宿で他の受験生と一緒にになったとき、彼らの一人が化学の勉強をしていて「炎色反応」を語呂合わせで暗唱していた。「リアカーナキケイムラ……」。それを聞いて、「それ何？」と尋ねると、彼は「え?! 知らないの? それで受験するの?」と驚き、呆れていた。その時の私の受験生としての学力はそのレベルだった。

受験失敗後、予備校に入った。国立大学理系を目指すクラスだった。予備校では必死に勉強した。そのお陰もあって模擬試験の成績も良くなり、今度は何とかどこかに合格するレベルにはなってきた。

夏休みが明けた頃、志願先の大学・学部を絞り始めたときに、改めて「大学で何を学びたいのか」を考え直した。予備校に入った時は「技術者になる」ことが前提だったが、高専を卒業して半年過ぎた今、改めて考えると技術者に拘る必要はないと思えてきた。「せっかく高専を卒業したのだから……」と思っていたけれど、今はそう考えるのをやめよう。「高専出身」であることを忘れて、今一度「自分は本当に何を学びたいのか」を考えてみた。

そして出た答えは「哲学」だった。大学で学べる学問分野について調べていて、学問の世界に関する視野が広がり、それらについて検討しているうちに、哲学こそが自

分が本当に学びたいと思える学問分野であると思うようになった。

ただ、大きな問題があった。哲学は文系の学問であるから哲学を学ぶためには文系の学部に入學しなければならなかった。そして、文系学部に入學するには社会科や漢文の成績が重要だった。しかし、その時の私は、理系科目は得意だったが社会科は苦手で、国語も漢文が弱かった。

哲学を学ぶことを諦めかけた時に、理系で受験して文学部の哲学科へ進む道が東京大学にあることを知った。模擬試験の成績から考えて合格の可能性はあったが確実とは言えなかった。しかし、理系科目で受験して哲学を専攻できる大学は他になかった。選択の余地はなかった。まさに背水の陣を敷いて、私は東京大学理科Ⅱ類を受験し、幸いにも合格することができた。

以上が、高専→技術者という道から大学進学の手へ転進することになった経緯である。

大学入學後、教養課程でいろいろな授業を受けているなかで自分の知的関心が変化し、また大学の制度の問題など様々な要因が作用して、結果的には、私は専門教育課程で教育学部へ進むこととなったのだが、その経緯を書くとなると長くなりすぎるので、この話はここで終わりにしたい。

* * *

学生時代の思い出のもう一つは、ある中学校で自主授業の支援教師をした話だ。

教育学部に進学した時、私は特に教師になろうという志を持っていなかった。教師になるためというよりも教育という問題に関心があったので教育学部へ進学したのだった。学部のカリキュラムも教員養成のためというよりも教育学のさまざまな分野について学ぶための科目になっていて、実際、卒業後に教員になる学生はほとんどいなかった。

学部で教育に関わるさまざまな勉強をし、また自分自身の経験も含めて現実の教育の問題について考える中で、教師という仕事に強い興味が湧いてきた。そして、4年生になり、卒業後の進路を考えなければならなくなった頃は、中学か高校の教師になりたいという気持ちが強くなっていた。

大学卒業後は教師になりたいと父親に伝えた時の反応は忘れられない。父親はこう言った。

「どんな職業についてもいい。しかし、教師だけはやめろ。教師は人間のクズだ」。

「人間のクズ」という言葉は衝撃的だった。

私の父親は大正3年の生まれで、戦前の尋常高等小学校（今の中学校）しか出ていない。学校生活では学業成績が良くなかったため、教師からはさんざん馬鹿にされたらしい。詳しい話は聞かなかったが、教師に対して強い不信任を抱くような学校生活だったのだろう。

私自身の学校生活を振り返ると、人間として立派な教師もいたが、人間としてどうなのかわけられた教師もいたから、父親の教師観をあなたがち否定する気にはならなかった。

しかし、父親のその言葉に対して私が返した言葉はこうだった。
「どの職業にも特に魅力はない。なりたい職業があるとしたら、それは教師だ。教師以外になりたい職業はない」。

私は〈人を相手にする仕事〉がしたいと思っていた。そして、その時の私には、その仕事として教師という職業しか思い浮かばなかったのだ。

父親のそんな反対があったが、とにかくいくつかの県の中学高校の教員採用試験を受けた。しかし、結果はすべて不合格だった。やはり、勉強量が決定的に不足していた。

教員採用試験に向けて、参考書を揃えて受験勉強に取り組んだのだが、後から考えてみると、この時も、高専在学時の大学受験と同じように、周囲と一緒に勉強する友達もなく、取り組み方としては質量ともに不十分なものだったと言わざるをえない。

夏休みが明けた頃だったか、大学の友達から、栃木県のT町で廃校が予定されている中学校の保護者が地域の住民と共に学校廃校に反対して、同盟休校をしていることを聞いた。

私が大学生だった1970年代前半、中学高校の受験競争が激しくなり、生徒による校内暴力が頻発するなどの問題が教育界では注目されていた。経済の高度成長によって全国的に家計に余裕のある家庭が増え、子どもを大学へ進学させる親が増え、普通科高校への進学志望者が増え、中学段階での受験教育が日本中の全ての地域に広がって行った頃だ。

文部省は国家の教育政策として地方の小規模校を統合してその地域の都市部に大規模校を作りやすくする政策を打ち出していた。その政策によって、全国の市町村では、それぞれが地域の中に抱えている小規模校を廃止して、その中央部に大規模校を設置するところが増えた。

栃木県のT町もそのような市町村の一つだった。T町には5つの中学校があり、山間部などに点在していた。それを二つの学校へ統合するという計画案が町議会で承認されたことに対して、地域の住民が統合反対を目指して同盟休校に踏み切り、さらに学校で自主授業を実施するという行動に出たのである。

1970年、町議会において中学校統合が議決された時、統合2中学の一つN中学校へ統合される地区のうちS地区とH地区の住民が統合反対の声をあげた。二度の同盟休校の後、1973年6月、県議団が仲介して調停がなされ、その調停案によってその当時の生徒は全員、両中学校に卒業するまで通学できることになった。ところが同年9月、文部省が学校統合に関する第2次通達（「住民の意向に反する無理な統合をし

ないように」との内容)を出したことをきっかけに、住民は再び両中学校の存続を要求して統合反対運動を再開した。

それに対して町当局は全く譲歩せず、結局、事態は進展しないまま1974年4月、住民は3回目の同盟休校に入った。しかし、今回、同盟休校に入ったのは新1年生の生徒だけであった。2、3年生は正規の授業を受けており、当然、正規の教員が教えていた。制度上は統合新中学校に在籍している1年生だけが同盟休校をしているという状況になってしまった。

同盟休校に入った保護者と住民は、知り合いの繋がりを通して自主授業を担当してくれる人間を探した。

私が自主授業の支援教師としてS中・H中で授業をするようになったのは1974年9月である。同盟休校が始まって5ヶ月が経っていた。私が参加した時は、支援教師としてすでに数人の人が活動していた。一人は40代の塾教師で、他に数人の大学生がいた。

私は大学の友人から事情を聞いて参加することにしたのだが、その時、私はこんなことを考えていた。

——そもそも、同盟休校をしている住民の人たちは、町の中心にできた大きくて立派な校舎に移ることになぜ反対しているのだろうか？ 彼らの考えを聞いてみたい。また、町の行政当局が立案し、町議会も賛成の議決をした「学校統合」という方針に対して、住民はなぜ「同盟休校」という激しい形で抵抗をしているのだろうか。それを知りたかった。また、他方では、地域の住民という当事者の意向を十分尊重することなく、学校統廃合という政策を実施した行政当局のやり方に対する疑問も強く感じていた。

9月に初めて中学を訪れてから12月まで、私は毎週のようにT町へ通い、二つの中学校で子どもたちに授業をして、さらに保護者や同盟休校を支援している住民の人たちと色々と話した。上記のような疑問をこちらからぶつけたこともあった。

そこで私が知ったのは、彼らが、地域にある小学校や中学校を「自分たちの学校」「自分たちの村の学校」と捉え、それらの学校に対して極めて強く深い愛着を感じているということだった。「おらが村の学校」という言葉を何度か耳にしたことを覚えている。

彼らが地域の学校を「自分たちの学校」とみなすにはそれなりの理由があった。

S中学は第二次大戦後に設置された中学だが、そもそもその校地は地域住民が共同で所有していた土地をT町に提供したものだった。校舎の建築に使った木材は、地域の森林から切り出してきたものが使用された。そのようにして建てられた学校は地域住民との繋がりが非常に強く、住民は折々に学校を訪れて、教師と話をしたり、地域で取れた野菜などの食べ物を持って来て教師とともに食べたりといった関わりを日常

的に行っていた。

H中学は明治時代に設置された100年の歴史を持つ学校だった。地域の住民は、中学生の親も、その親も、さらにそのまた親も、皆、H中学で学び、卒業していた。

実は、1960年代まで、日本の多くの小中学校は——とりわけ山村地域の学校は——、元々、地域と強い繋がりがあった。S中やH中もその一例だ。当時の学校と住民の関係は、最近よく言われる「学校と地域の連携」という言葉で捉えることが可能だが、そのような表現ではかえってよそよそしい感じがして違和感がある。それほどまでに、学校はまさに地域の一部として——しかも地域の精神的な拠り所として——地域の中に根付いていたのだ。

このような地域住民と地域の小中学校との密接な繋がりは、1960年代から70年代にかけて、全国的な学校統廃合政策が実施されることを通して崩れていった。そして、学校は「関係者以外立入禁止」の空間となり、地域の学校というより国家の教育機能を担う一公教育機関としての性格を強めていった。しかし、S中学やH中学の保護者や地域住民にとって、S中やH中は日本国家の公教育の一機関ではなく、まさに自分たち自身の村落共同体を再生産するための拠り所に他ならなかった。

したがって、彼らにとって、その地域から学校が消えてしまうことは自分たちが何世代にもわたって受け継いできた共同体の拠り所を失うことに他ならないのだった。自分たちの生存の根拠を失うことに等しかった。そのような意味を持った学校統廃合に生活を賭けて反対し抵抗しようとするのは当然と言うべきだろう。

私自身が経験として知っているのは東京の小中学校だが、それらは、すでに地域との繋がりが断ち切られた「国家の教育機関としての学校」だったので、S中やH中で保護者や地域住民から聞いた話は、私にとって非常に新鮮で、教育を学ぶ学生としての知的好奇心も強く刺激された。地域に暮らす人々にとって、その地域の小学校や中学校が「自分たち（＝自分たちの地域）を再生産するための拠り所」になっているなどということは、当時の私にはとても想像できないことだった。

住民の人たちの話を聞いて、私は、住民が学校の統廃合に反対して同盟休校・自主授業という激しい行動に出るのは無理からぬことだと思った。少なくとも、町当局は、住民と対話し、彼らの声に耳を傾けるべきであると、私には思えた。

私は支援教師としてT町に通いながら、学校と地域の関係についてずっと考えていた。9月から約4ヶ月間、毎週のようにT町に通い続けたのは、何よりも、同盟休校中の子どもたちに授業をするためだったけれど、それだけでなく——もしかしたらそれ以上に——、学校統廃合反対の住民運動が、学校という存在、教育という活動が人間にとって持っている意味について、その時の私自身に深く問いかけているのではないかと感じていたからだった。

その年の12月、町当局と住民側が交渉し、最終的な結論として、翌年4月から統

合新中学へ通学するということになり、同盟休校・自主授業は終了となり、統合反対運動も終焉を迎えることになった。

4ヶ月ほどの短い時間だったけれど、この時の経験はその後私が教育の研究者としての道を選ぶ際にも、研究のテーマや方法を選ぶ際にも大きな影響を及ぼしたと思っている。

田中節雄 教授 略歴

Academic Career of Professor Setsuo TANAKA



教育・研究歴(職歴を含む)

- 昭和50年 3月 東京大学教育学部学校教育学科卒業
- 昭和50年 4月 東京大学大学院教育学研究科教育社会学専攻修士課程入学
- 昭和52年 3月 東京大学大学院教育学研究科教育社会学専攻修士課程修了 (教育学修士)
- 昭和52年 4月 東京大学大学院教育学研究科教育社会学専攻博士課程入学
- 昭和57年 3月 東京大学大学院教育学研究科教育社会学専攻博士課程単位取得満期退学
- 昭和56年 4月 国立栃木病院附属看護学校非常勤講師 (社会学担当)
- 昭和57年10月 東京都大田高等保育学院非常勤講師 (教育原理担当)
- 昭和58年 7月 筑波大学社会科学系社会学専攻技官
- 昭和62年 4月 椋山女学園大学人間関係学部助教授
- 平成 8年 4月 椋山女学園大学人間関係学部教授
- 平成17年 4月 椋山女学園大学人間関係学部長
- 平成26年 4月 椋山女学園大学大学院人間関係学研究科長
- 令和 2年 3月 椋山女学園大学定年退職, 名誉教授

田中節雄 教授 著作目録

Publication List of Professor Setsuo TANAKA

1. 著書

- 1) 自己実現社会 (共著), 担当部分: 民衆にとっての近代公教育 (pp. 191-220), 昭和62年9月, 有斐閣.
- 2) 教育の現在—歴史・理論・運動, 第3巻 現代的教育理論 (共著), 担当部分: 第2章 学校とは何か—社会的諸関係の総体としての学校— (pp. 69-97), 昭和63年11月, 社会評論社.
- 3) 現代教育科学論のフロンティア (共著), 担当部分: 第1章 国家論と教育 (pp. 29-54), 平成2年6月, エイデル研究所.
- 4) 共生時代の学校像—新教育原理 (共著), 担当部分: 第Ⅲ部 第2章 教師文化を考える (pp. 145-159), 平成7年4月, 自由書房.
- 5) 近代公教育装置と主体 (単著), 238 pp., 平成8年4月, 社会評論社.
- 6) 教育言説をどう読むか (共著), 担当部分: 第Ⅰ部 1 学校は子どもの個性を尊重するところである (pp. 21-44), 平成9年4月, 新曜社.
- 7) 人間の探求 (共著), 担当部分: 学校が与える文化の理論的検討—その根拠となる社会的論理— (pp. 297-316), 平成10年4月, 相山女学園大学.
- 8) 教育の可能性を読む (共著), 担当部分: 学校の論じ方—存立のメカニズム=変革の論理— (pp. 106-125), 平成13年5月, 情況出版.
- 9) 教育をひらく (共著), 担当部分: (pp. 122-152), 平成20年9月, ゆみる出版.
- 10) 続 教育言説をどう読むか (共著), 担当部分: ゆとり教育が学力低下を招いた (pp. 27-58), 平成22年1月, 新曜社.

2. 学術論文

- 1) 教育への親の関わりと教育権 (単著), 昭和52年7月, 思想の科学, pp. 2-10.
- 2) 地域社会における生涯学習の展開 (共著), 昭和54年7月, 総合研究開発機構, 担当部分: II-2 上田市の教育行政, pp. 28-33.
- 3) 荒川区の中学生の意識と行動—中学生の問

題行動をめぐって— (共著), 昭和57年11月, 日本青少年研究所, 担当部分: 第3章 中学生の学校生活, pp. 35-43.

- 4) 高等学校の就職指導と生徒の進路形成 (共著), 昭和58年10月, 東京大学教育学部紀要, 第23巻, 担当部分: 就職指導における選抜型と選択型, pp. 70-74.
- 5) 地下百尺の思想—北方教育が提起したもの— (単著), 昭和59年6月, ひとりから, 2号, pp. 46-62.
- 6) 中高一貫教育に関する研究 (共著), 昭和59年7月, 中等教育研究会, 担当部分: 第4章 中学校教育に関する親の意見, pp. 88-98.
- 7) 草津町の中学生の意識と行動—問題行動をめぐって— (共著), 昭和59年7月, 東京大学教育社会学研究室, 担当部分: 第Ⅱ部 第1章 学校生活と問題行動, pp. 23-39.
- 8) 〈実証主義〉と〈現実再構成主義〉—社会学におけるリアリティの問題— (単著), 昭和60年3月, 社会学ジャーナル (筑波大学社会科学系社会学研究室紀要), 第8巻, 1・2号, pp. 62-77.
- 9) 社会化の担い手としての学校分析 (単著), 昭和60年5月, 教育社会学研究 (日本教育社会学会紀要), 35, pp. 99-109.
- 10) 社会学における因果関係 (単著), 昭和60年9月, 社会学ジャーナル (筑波大学社会科学系社会学研究室紀要), 第9巻, 1・2号, pp. 52-72.
- 11) 教育変動に関わる諸主体 (その1) (単著), 昭和61年10月, 響鳴, 3, pp. 139-147.
- 12) 学校の潜在的カリキュラム (単著), 平成2年3月, 相山女学園大学研究論集, 21, pp. 139-147.
- 13) 私立小学校の卒業生の経歴 (共著), 平成4年10月, 相山女学園大学人間関係学部教育学研究室, 担当部分: 第2章 卒業生の経歴を規定した要因, pp. 17-39.
- 14) 私立小学校卒業生の進路選択 (単著), 平成5年3月, 相山女学園大学研究論集, 24, pp. 333-345.

- 15) 若年技能員の職場定着過程に関する実証的研究—中京地区自動車産業の事例から—(共著), 平成5年5月, 中部産業・労働政策研究会, 担当部分: 第4章第3節 初任職場における経験と職場適応, pp. 74-122.
 - 16) 私立小学校在籍者の親の階層と意識(単著), 平成6年3月, 椋山女学園大学研究論集, 25, pp. 159-169.
 - 17) 個性化教育の成果—卒業生の追跡調査より—(単著), 平成7年3月, 椋山女学園大学研究論集, 26, pp. 143-156.
 - 18) 近代化の極限としての現代教育(単著), 平成8年3月, 椋山女学園大学研究論集, 27, pp. 97-111.
 - 19) 高度経済成長期の教育思潮1956~70年(単著), 平成8年7月, 教育総研年報'96, pp. 162-166.
 - 20) 選抜システムとしての教育システムへの視線(単著), 平成9年7月, 教育総研年報'97, pp. 38-42.
 - 21) 個性化教育からの挑戦(単著), 平成9年11月, 季刊FORUM 教育と文化, 9, pp. 13-22.
 - 22) 学校教育の構造的制約性と相対的自律性(単著), 平成10年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 29, pp. 185-196.
 - 23) 注目される「学力観の転換」(単著), 平成10年8月, 教育評論, 617, pp. 22-25.
 - 24) 学力観の転換(単著), 平成11年2月, 季刊教育改革, 4, pp. 15-21.
 - 25) 〈共同体〉による教育としての学校教育(単著), 平成11年10月, 季刊FORUM 教育と文化, 17, pp. 39-46.
 - 26) 一人ひとりの教員がカリキュラムメーカーになるために(単著), 平成12年6月, 教育評論, 638, pp. 10-13.
 - 27) 戦後日本の学校論(1)—海後勝雄—(単著), 平成14年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 33, pp. 91-102.
 - 28) 梅根悟の学校論(単著), 平成14年3月, 椋山女学園大学「人間関係学研究」人間関係学部改組発足・人間関係学研究科創設2周年記念号, pp. 87-198.
 - 29) 勝田守一の学校論(1)—社会過程としての教育—(単著), 平成15年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 34, pp. 113-123.
 - 30) 中学校の教師の学習観(単著), 平成16年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 35, pp. 91-101.
 - 31) 勝田守一の学校論(2)—選抜装置としての教育—(単著), 平成17年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 36, pp. 43-52.
 - 32) 学校の中の教師—インタビューを通してみた小学校教師の現状—(単著), 平成18年3月, 椋山女学園大学「人間関係学研究」, 4, pp. 101-111.
 - 33) 1980年代以降の国家教育政策の特質—臨時教育審議会答申の分析—(単著), 平成20年3月, 椋山女学園大学「人間関係学研究」, 6, pp. 29-38.
 - 34) 高校生は学びたがっている—普通科高校生調査から—(単著), 平成21年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 40, pp. 29-40.
 - 35) 普通科高校教師の学習観(単著), 平成22年3月, 椋山女学園大学「人間関係学研究」, 8, pp. 31-41.
 - 36) 近代公教育イデオロギーの転換—1990年代国家教育政策の分析—(単著), 平成25年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 44, pp. 23-33.
 - 37) 「学力」という問題設定(単著), 平成27年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 46, pp. 13-24.
 - 38) 教育機会均等論批判(単著), 平成27年3月, 椋山女学園大学「人間関係学研究」, 13, pp. 15-26.
 - 39) 戦後日本人の利己主義と道德教育(単著), 平成28年3月, 椋山女学園大学研究論集(社会科学篇), 47, pp. 17-30.
3. その他の著作
- 1) ディスクーリング論(共著), 昭和52年, 海外教育研究, Ian Lister “Deschooling: A Reader”, Cambridge Univ. Pr., 1974の抄訳.
 - 2) 資料 現代世界教育改革(共著), 昭和58年10月, 三省堂, 担当部分: 「国際関係」の項の編集と翻訳および解説, pp. 9-59.
 - 3) 産育と教育の社会史2—民衆のカリキュラム 学校のカリキュラム(共著), 昭和58年10月, 新評論, 担当部分: 「学校文化の社会学 (Basil Bernstein “On the Classifica-

tion and Framing of Educational Knowledge”) の翻訳と解題, pp. 143-184.	関係学研究, 11, 111-113.
4) 教育学専攻の頃 (単著), 平成24年, 人間	5) 学生時代の思い出 (単著), 令和3年, 梶 山女学園大学教育学部紀要, 14, 295-302.